［ボクらの罪団］×［劇団クラゲ荘］
コラボレーション舞台
『あくと』
企画書

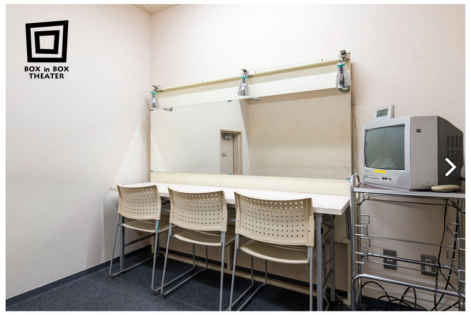
[公演日程]
2022年
10月12日(水) ～ 10月16日(日)

[劇場]
シアターグリーンBOX in BOX THEATER
　総客席数　104席

客席

舞台

楽屋1



楽屋2

[稽古スケジュール]
2022年 2022年9月9日(金)～10月9日(日)

※この期間の中で基本的には
①13:00～17:30
②17:30～21:30
と2部制に分けて進行をしていく予定です。
●NGについて
前もって他の仕事が入っている場合NG日を提出ください

※10月3日～10月9日は集中稽古期間のためNGはご遠慮ください。

〒171-0022 豊島区南池袋2-20-4
TEL：03-3983-0644
https://theater-green.com/theater/boxinbox/

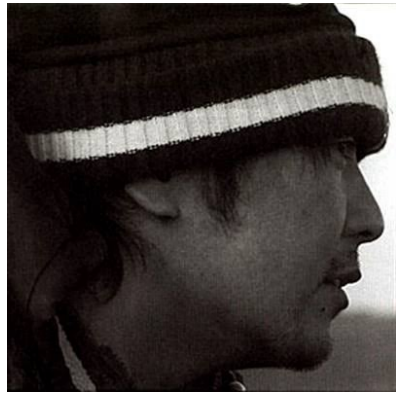
ボクらの罪団
東京を中心に犯行を続ける社会不適合者集団。映像、舞台、
イベント等様々な活動を行うエンタメ活動集団として立ち上げ。
ジャンルの性格上、一歩間違えればただの自慰行為で終わることへの
危うさと罪悪感を享受し、人類最大のタブー「生まれてきてごめんなさい」
の精神のもと、謙虚に遊び謙虚に笑い、そして願わくばいつかは
“ 罪滅ぼし ”できる（＝需要を得る）ような、そんな団体を目指す。

劇団クラゲ荘
作・演出の前田万吉と主宰の幸将司の二人で
2005年旗上げ、各公演にて2000人を超える動員を記録
している。

THESPIAN SINNER

あくとA

[作・演出 from 劇団クラゲ荘]



前田万吉

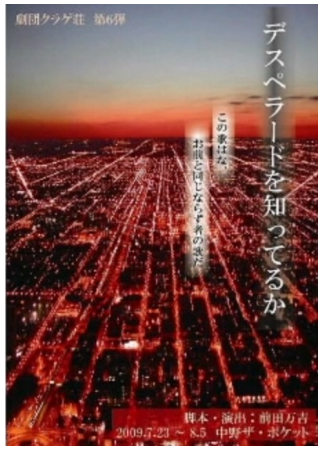
映画監督、舞台、ドラマ、作詞、作曲、プロデュースなど、
多方面で活躍しているクリエーター。
映画「東京ＤＡＹＳ」にて、蛯名プレミアム映画祭にてグランプリを受賞。
映画「魂を握りつぶした男」で商業映画デビュー。
劇団クラゲ荘を立ち上げ、各公演にて2000人を超える動員を記録。
舞台「十年希望」では、ロクソドンタ演劇祭にてグランプリを受賞。
その後、女優アイドル「ピカマイ」を立ち上げ、専用劇場にて年間延べ一万人を動員。
シングル曲「キラリキラリ」はオリコンチャート１０位を記録。
現在、千葉テレビ連続ドラマ「どっち」などを監督、脚本。
クリエーターとして活動しながら、胸キュンＦＥＳのプロデュースと
ＳＡＷＡＧＥの総合プロデューサーとして活躍している。

最近の主な作品

2020年　舞台「えんとつ町のプペル」
演出・脚本
2020年　舞台「才能のない僕らは・・。」
演出・脚本
2022年　ドラマ「どっち？」
監督・脚本（千葉テレビ）
2021年　ドラマ「いらっしゃいませ、強盗様」
監督・脚本（千葉テレビ）
2021年～2022年　音楽番組「胸キュンアイドルステーション」
監督・構成（千葉テレビ）
2020年　映画「星を捨てて・・。」
脚本・監督

劇団クラゲ荘
【公演記録】

2019年「才能のない僕らは・・」
　脚本・演出
2013年「メロディ」
　脚本・演出
2010年「星屑列車に二人で・・」
　脚本・演出
2009年「デスペラードを知ってるか？」
　脚本・演出
2009年「逃亡ヒーロー」
　脚本・演出
2008年「魂を握り潰した男」
　脚本・演出
2007年「ヘブンズドア」
　演出
2006年「背中を見せて」
　演出
2005年「そばにおいでよ」
　脚本・演出
2004年「青空のメロディ」
　演出



etc

あくとB

[作・演出 from ボクらの罪団]

高橋俊次

ボクらの罪団、過去全ての舞台の脚本・演出を行う。
常に独自性と中毒性のある作品を作り続けている。
またボクらの罪団の楽曲も全て作詞を行い、
舞台だけではなく、幅広いエンターテイメントを展開している。

【舞台】

・演出作品

2014年 ボクらの罪団初犯公演「プレイ」(テアトル BONBON) 作・演出
2015年 ボクらの罪団第二犯公演「ディスプレイ」(萬劇場) 作・演出
2015年 ボクらの罪団単毒 LIVE「オナニ◯の向こう側」(TACCS1179) 作・演出
2016年 ボクらの罪団第三犯公演「リプレイ」(シアターグリーン) 作・演出
2016年 ボクらの罪団単毒 LIVE「生涯毒身宣言」(アトリエファンファーレ高円寺) 作・演出
2017年 ボクらの罪団第四犯公演「タブー」(萬劇場) 作・演出
2018年 ボクらの罪団 Special Edition「デスペラードを知ってるか?」(シアターグリーン)
脚色・演出
2018年 ボクらの罪団第六犯公演「プレイ –killtimefor×××–」(築地ブディストホール)
作・演出

・原案

2019年 Z-project「ケース」(上野ストアハウス)

・企画・プロデュース

2021年 ボクらの罪団Special Edition 2021「Calling」(コフレリオ新宿シアター)

【CM】

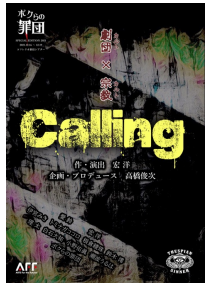
2021年 C3/シースリー(WEB) 監督
2021年 Zローション(WEB)監督

【楽曲】

2015年 演罪 / ボクらの罪団（4 月配信）作詞
2020年 XXX-EP / ボクらの罪団（6 月配信）
XXX feat.加護亜依 / ボクらの罪団-作詞
MONEY feat.加護亜依 / ボクらの罪団-作詞
SHINKIROU feat.加護亜依 / ボクらの罪団-作詞
灰&蝋 feat.加護亜依 / ボクらの罪団-作詞

ボクらの罪団
【公演記録】

【舞台】
・2014年：初犯公演「プレイ」@テアトル BONBON
（出演：ボクらの罪団／及川奈央／稲川淳二 ※映像出演 ほか）
・2015年：第二犯公演「ディスプレイ」 @萬劇場
（出演：ボクらの罪団／KONAN／与沢翼 ※映像出演 ほか）
・2016年：第三犯公演「リプレイ」@シアターグリーン BOX in BOX THEATER
（出演：ボクらの罪団／加護亜依　 ほか）
・2017年：第四犯公演「タブー」 @萬劇場
（出演：ボクらの罪団／新田祐里子／山本圭壱(極楽とんぼ) ※映像出演 ほか）
・2018年：SPECIAL EDITION第1弾「デスペラードを知ってるか？」
@シアターグリーン BOX in BOX THEATER
（出演： ボクらの罪団／加護亜依／TOMORO ※映像出演 ほか）
・2018年：第五犯公演 「プレイ –kill time for ×××–」@築地ブ　ディストホール
（出演：ボクらの罪団／赤西 礼保／加護 亜依 ほか）
・2021年： SPECIAL EDITION 2021「Calling」@新宿コフレリオシアター
（出演：ボクらの罪団／宏洋 ほか）



【楽曲MV】

「XXX feat.加護亜依 」

「灰&蝋～生まれてきてごめんなさい～ feat.加護亜依」

「SHINKIROU～ feat.加護亜依」

「MONEY～ feat.加護亜依」

YouTube

ボクらの罪団 23チャンネル

あくとA

●登場人物

＊井川卓三・・・主人公

＊数馬俊彦・・・探偵

＊立花雅也・・・半グレ、リーダー的な存在

＊本崎大志・・・半グレ（カメラマン）粗削りな性格

＊小金沢レイ・・・半グレ

＊安田金太・・・半グレ

＊井上芽衣・・・

＊鎌田知恵・・・

＊権藤虎竜・・・警察

＊琴吹智洋・・・警察

ストーリー（あくとA）

【ACT．1】
雲の切れ間から月が顔を出す。月明かりに照らされたバス停で、私は茫然と空を眺めた。

私（卓三）は今日、男四人組が乗車するバスに運転手の助手として乗車予定だ。

バス停前では私の他に、男四人、女性二人が輪になって談笑している・・。男四人はAV男優とそのスタッフの三人。
会話の内容はグラビア撮影に関して男性たちが女性に話をしているが、きっと騙されているに違いない・・。
男たちは、二時間後には優しい男から狼に変わろうとしているのを私は知っている。

しばらくして、２００m先にあるビルとビルの間から右折してバスが走行してきたことに気付く。男たちは、鞄を手にし、乗車準備に取り掛かる。

このバスの運転手は、私が雇った探偵（数馬）で、私は彼に５００万を渡し、協力をしてもらっている。
私は、今日その四人をバスに乗せ、行方不明の自分の娘の居場所を突き止めようと考えているのだ。

世間からみたら、私は気の弱い男のように思われているだろう・・。実際、先日も、警備の仕事中に若い男に仕事のミスを指摘され唾を吐きかけられた。
でも、私はそんな状況でも笑って謝るような性格だ。お見合い結婚した妻も、私の頼りなさに１０年前に離婚された。でも、娘だけは私のことを気遣い、いつも連絡してきて一人暮らしの私の家にご飯を作りにきてくれた。優しい娘だった。
そんな娘が２年前に行方不明となったのだ。警察にも捜索願を出したが、一向に進展する気配もなく、私は、貯めたお金で探偵に娘の捜索を依頼した。そして、探偵（数馬）の情報では、この男組四人が何か娘の行方に関係していると情報をキャッチしたのだ。

　それは一か月前・・。数馬からの連絡で私は探偵事務所へと向かった。そして、探偵から「驚かないでほしい・・。」と、念を押された後。
パソコン画面にバスの中の映像が流れた・・。そして、娘と思われる女性がそこにはいた。顔にはモザイクがかかっているため、いや、違う・・。
そう思いたかったが、娘がインタビュー時に、スマホについているキーホルダーを画面上に見せ、「父にディズニーランドで買ってもらった」と話しており、
私はやはり娘だと確信した。そして、私はその男たちと娘が山の中で行為に至ろうとしたとき、画面を消した・・。探偵からは、このAVは世には出回らない裏のAVだと話していた。

 どうして、その情報をキャッチしたかと言うと、探偵は娘と同じ大学生の友達から聞いたと話していた。

私はすぐに警察にその情報を伝えた。でも、またしても警察からの進展は何もなく、私は独自で探偵と共に男たちと会うように考えた。

そして、探偵の協力の元、その男たちのアパートを突き止めた。男たちはAVの撮影のほか、オレオレ詐欺も働いていることを知る。そして、男たちの一人で、父が政治家の親がいた。私は、何故私の娘の捜索を警察が協力的でなかったのかがわかった・・。
きっとその政治家の力が働いているのであろう。もう警察には、協力を仰ぐのはやめよう。そう感じてはいた。

 そして、私は、その男たちのアパートを訪ねたが、一向に話を聞いてもらう感じではなかった。私は、どうして男たちに娘の居場所を供述させようか・・。そう、私は、考えた。

いや、供述をさせた所で、もしかしたら政治家の力で揉みくちゃにされる可能性がある。私はあの男たちを供述させ、考えたくはないが・・・、もし娘が生きておらず、娘を殺した場合は、私は全員を殺そう・・。そう考えた。
でも、どうすればいい・・。私はまず探偵に相談した。もちろん、殺す可能性があることを伏せてだ。そして、私はある計画を伝えた。探偵にそのことを離したら、日和ってはいたが、５００万のお金を見せたら、しぶしぶ協力することになった。

 探偵は根っからの明るい性格で、でも、どこか悪い一面も感じられ、映画のサムハンキンポーを思い出させる。彼ならば人が躊躇する一歩も何も考えずに一歩踏みだせる性格に思えた。
だから私は、そんな男ならば金させ出せば、この計画にものるだろう・・。そう考えたのだ。

 私は、四人の男たちのアパートの郵便受けに、自分で作った激安バスのチラシを入れた。普通に借りる料金の半額の値段だ・・。私が見た娘のAVはバスの中での撮影が主だった・・。
そして、それはシリーズ化されている作品であり、次撮影があればまたバスが必要と考えた。

 私の読み通り、2週間後にその男たちから電話があったのだ。「AVの撮影は大丈夫ですか？」どす黒い声で男は話す。私は、すぐに探偵に連絡し、準備に取り掛かった。

 数馬の運転するバスがゆっくりと速度を落とし停車する。

バスに乗り込む男四人と女性二人。そして、最後に私が乗り込む。

バスは、ゆっくりと走り出す。

雲はやがて空を覆いかぶし、雨雲へと変わろうとしていた。

【ACT．2】
バスはゆっくりと山の中を走行している。男Aは鞄の中から、カメラを取り出す。

女性二人に向かってインタビューを始める。にこやかな雰囲気で始まるインタビューはとてもその後、AV撮影に変化するようには感じられず、女性二人も楽しそうにインタビューに答えていた。
私は、その光景を前方の席から見ていたが、しばらくして、ちょっと下ネタのインタビューに変わり始めた。私はその時に、鞄からナイフを取り出した。
そして、男Aの後ろに行き、男Aの首にナイフを添えて「動くな！」と叫んだ。しかし、今までそんなことをしたことがない私はブルブル震え始めた。
ゆっくりと息を飲んだ私は、男Aを床に手をつかせた。

バスはゆっくりと走っていく。しかし、目の前を警察が検問していた。「検問だ！」と運転している探偵は叫ぶと、「強引に突破してくれ！！」と伝えたが、探偵はうろたえた。
だから私は、探偵の運転を変わり、強引に検問を突破していく。バスはパトカーから追いかけられながら、男Bはバスの窓を開け「助けてくれ！！」と叫ぶ男。

私は、運転を探偵に交代させ、男A達に向かってナイフを突きつける。しばらく警察とカーチェイスとなるが、バスは崖から落ちていく形となる。

頭を抑えながら、目覚めた私は、すぐに男たちを見るが意識を失っているようだ。警察のサイレンが聞こえる。

それと同時に乗車していた男たちと女性二人は起き上がる。

私はすぐに男Aを捕まえたと同時に、パトカーがやってきて、「車から降りなさい！！」と拡声器で伝えてきた。
私は、すぐに窓から男Aの顔を突き出し、ナイフを添え警察に向かって「入ってきたらこいつら全員殺すぞ！！」と叫ぶ。

警察は「そんなことはやめなさい！！」と、伝えてくるが、私は窓を勢いよく閉めた。

【ACT．3】
私の顔はサイレンの光で照らされている。

バスの中にいる男たちへナイフを向け、私は全員を縛り上げた。

探偵はあたふたしている。申し訳ないことをしたなと思いながらもここはなんとか付き合ってくれと説得した。しかし、自分も巻き込まれると感じた探偵はバスから出て警察の元へと向かおうとした。
私は慌てて窓を開け、警察に向かって、「俺と（探偵に指さして）とこいつの邪魔をしたら、全員殺すぞ！」と、伝えた。警察は「二人ともこんなことやめなさい！！」と、拡声器で話し、警察からは二人が共犯であると思われることになる。
探偵は頭を抱えたが、「とりあえずは、ここにいてくれ！」と懇願し、「自分は巻き込まれただけ。今回の件も、あんたに騙されただけだ。」そういう探偵の言葉に私は頷いた。

私は、男Aに向かって、自分の娘について何か話せと伝えた。しかし、「男Aは何も知らない」と話す。私は仕方なく男Aの右腕を勢いよく刺した。
「うわああ〜〜〜〜！！」と、バスの中から叫び声が響き渡る。警察も臨戦態勢となり、森の中からは、カラスが数羽ほど、朝だと勘違いしバサバサと飛んでいく。

私は、男Aに「次は左手を指すぞ」そういった時、探偵は「もうやめとけ！！それ以上はやばいぞ！」と止めに入る。その時、男Aは後ろを振り返って、男たち３人を見た。
（・・何か、隠している・・）そう感じた私は、勢いよく右手を指そうとした瞬間、「わかった！言うよ！」と話し始める。

そして、娘はAVを撮影中に殺してしまってある場所に埋めたことを供述してた。私は怒り狂いそうになって「どこに死体を埋めたんだ！！」と叫んだ時、男Bは、縄をほどいていて、私の頭を力いっぱいカメラで叩いた。
私は意識を失った。しかし、男Bは、私が一時的に呼吸をしておらず、死んだと勘違いしている。

探偵は「じゃあ、警察の元へ逃げよう」と話すが、男Bは「あんた、話を聞いてたよな」と言われ、探偵は取り押さえら縄で縛られる。

男たち四人は「どうする？このまま警察へ逃げると俺たちも捕まるんじゃないか？」不安に襲われる。そして、男Cは正当防衛として意識を失っている探偵をその場で殺そうと考えた。
でも、男Dは、もう自首しようと話し始める。それくらいで、私は意識を取り戻し、男四人の話を聞いていた。

私は、再度男Cを捕まえながら、娘を埋めた場所を吐かせた。そして、探偵に向かって、「今からその場所へ向かうぞ。」と、話し、私は、男たちをバスから降車させ、バスは走り出す。
しかし、バスは３㎞ほど走行して、パトカーにふさがれ、立ち止まる。バスから降りてそれでも走り出そうとした私は、警察から取り押さえられる。

娘の埋められた場所へは向かうことはできなかった私は、泣き崩れて・・。

終わり

あくとB

●登場人物

＊ヤマト（33）・・・半グレグループのチームリーダー

＊成田サトシ（39）・・・両親から引き継いだ障害者が働く小さな工場を営んでいる。
＊リツコ（28）・・・サトシの恋人

＊ルイ（27）・・・サトシの義理の弟。障害者。
＊シュウ（46）・・・工場長的立場

＊マヤ（24）・・・ヤマトの取り巻きの女のひとり。ヤマトに惚れていて言うことをなんでも聞く。

＊ヤマトの部下1
＊ヤマトの部下2
＊ヤマトの部下3
＊ヤマトの取り巻きの女1
＊ヤマトの取り巻きの女2

＊工場の従業員1
＊工場の従業員2
＊工場の従業員3
＊工場の従業員4

＊コウ・・・半グレグループ幹部

あくとB

半グレグループの男・ヤマト（33）。
彼は詐欺などあらゆる悪事により生計を立てている。
アジトではあらゆる詐欺の練習が連日、劇団の稽古の如くヤマトによる仕切りで行われている。
ヤマト「いいか！芝居ってのはな！読んで字の如く芝がそこに居るくらい自然だってことだ！もっと役になりきれ！」
部下達「はい！！」
「もしもし母さん、俺だけどさ、実は〜で事故っちゃって」「〇〇くんの上司の田中ですが、今回〇〇くんが仕事でミスを・・・」等、詐欺の稽古をする部下達に熱血指導しているヤマト。
ヤマトは若い頃将来を期待されたVシネマの新人俳優だったが、暴行事件により謹慎となる。
やさぐれて過ごすヤマトだったが、ある日、不良の世界で名を馳せていた半グレグループ幹部の男コウ（38）に出会い、そのまま彼に憧れて裏の世界に足を踏み入れることとなった。
コウの元で弟分として働き実績を重ね、ヤマトは詐欺、裏AV、裏カジノなど手広く悪事を束ねているグループの中の1チームを任されるまで上り詰めた。
コウ「お前のチームもでかくなったなぁ」
ヤマト「コウさんの教えのおかげですよ」
コウ「無茶すんなよ」
ヤマト「まだまだ稼いででかくしますよ。世間は馬鹿が多いスから！ハハ！」
コウ「油断は禁物だ。この世は嘘に塗れてる。自分が見てる景色が真実かを常に疑え。裏の世界ってのは一歩足を踏み入れたら地雷ばかりだが、地雷は芝生の芝居をしているからな。踏んでドボンしないこった」
ヤマト「それ俺らのことでしょ？社会に溶け混んだ地雷ってのは。俺らは社会に潜んで夢を見させて刈り取る・・・劇団ですから！（部下達に）そうだろ！？」
部下達「はい、座長！！」
盛り上がる一同。
ヤマト「さ、次の劇場はどこだ？」
部下1「はい！現在候補に上がってるのは、俺の地元の後輩のサーチによるんですが、何でも親から引き継いだ小さな工場を営む成田サトシという男が居ましてね。そいつが・・・」

×××

寂れた工場。
成田サトシ（39）は知的障害者の義理の弟・ルイ（27）と二人暮らしだ。実の母を含む両親は4年前に事故で他界している。
その後も血の繋がらないルイを施設に預けることなく、経営難の中、引き継いだ障害者達が働く工場を切り盛りしながら面倒をみている心優しい男だ。サトシには結婚を約束している恋人リツコがいる。
リツコも自宅と工場を行き来し健気にサトシを支えている。
今日も工場で従業員のシュウ（46）と障害者の従業員数名で作業中、ルイは同じ障害者の従業員に対し無邪気にいたずらをしている。
サトシ「こら、ルイ！やめないと高い所つれてくぞ！」
ルイ「ヤダ！！高いとこ、怖い！怖い！！」
しゃがみ込み動かなくなるルイ。
サトシ「ほんとお前は高所恐怖症だな。高いところが怖かったらアレだぞ、成長できないぞ？」
ルイ「ヤダ！怖い！せーちょーしない！」
サトシ「それじゃ困るんだよな」
リツコとシュウはその光景を微笑ましく見守っている。

×××

そんなある日、工場の外。
一人遊びをしているルイにヤマトの取り巻きの女のひとりであるマヤ（24）が近づき、色仕掛けを仕掛ける。が、いまいちルイがその意味を理解せず誘いに乗ってこなかった為、電話でヤマトに相談するマヤ。
マヤ「ヤマト、どうしよう・・・」
ヤマト「どんな手を使ってでもいい！できなきゃお前は価値無しだ！」
マヤ「そんな・・・」
焦るマヤ。どさくさ紛れに「ママよ」と誘導したら、自らに抱きつかせることに成功。
マヤに覆い被さるルイ。
ルイ「ママ！ママ！」
マヤ「きゃあー、助けてー！（芝居）」
影に隠れ、その光景を撮影するヤマトの部下。

×××

後日、彼女がルイに性的暴行をされたとでっちあげたヤマトと部下達はサトシを脅し慰謝料をせびる。（通報し事件にする、動画をSNSに流すetc）
言われた金が用意できないサトシは印鑑や工場、土地を担保に借金してしまう。
ヤマト「（怯えている従業員たちに）恨むんだったらコイツ（ルイ）を恨めよ！全部コイツのせいだぞ！こいつのせいでお前達の人生お先真っ暗だな！」
捨て台詞を吐き立ち去るヤマト一行。

×××

この一件により工場は閉鎖の危機に瀕し、ヤマトとリツコの関係にも暗雲が立ち込める。（リツコはそれでもいいと言ったが）。
ヤマトが立ち去った後、泣いているリツコの元にやってきて元気づけようとするルイ。
ルイ「大丈夫！大丈夫！」
ルイの手を振り解き出て行くリツコ。
ルイ「？？」
他の障害者の従業員達がやって来てルイを責める。
従業員達「全部ルイくんのせい！」「僕たちもうここにいられないんだ！」「ルイくん殺そう！！」「殺そー！！」
従業員達から追い詰められ、パニックになったルイは高い場所に昇る。
ルイ「高いところから落ちたら死ぬよー！高いところから落ちたら死ぬよー！」
飛び降りるルイ。

×××

ヤマト達のアジトではルイが自殺したと話題に。
部下1「成田の野郎踏んだり蹴ったりだな」
部下2「前世でよっぽど悪いことしたんじゃねえのか？」
部下3「だったら俺らも来世は地獄っすか？てか死んだら地獄か」
ヤマト「馬鹿野郎。んなもんねえよ。死んだら何も残らねえ。無になるだけだ。そうすよね、兄貴」
コウ「グループの運営はお前に任せてる。が、慎重にやれよ？足元には」
ヤマト「地雷っすよね。大丈夫、抜かりはないんで」
コウ「だといいが」
立ち去るコウ。
盛り上がるメンバー達を他所にひとり罪悪感に駆られているマヤ。
ヤマト「どうした？」
マヤ「まさか・・・あたしがきっかけで人が死ぬなんて」
ヤマト「大丈夫だって、人はいつか死ぬんだ。しかも人じゃなく虫けらが一匹自滅しただけさ。そんなことくらいでへこたれてちゃ仕事なんねーぞ？」
マヤ「そんな、、、あたしはヤマトのために」
取り巻き女1「（ヤマトに）行こ？」
ヤマト「ああ」
女と部下を連れ立ち去ろうとするヤマト。
マヤ「ねえ、ヤマト・・・あたし警察に・・・」
マヤを殴るヤマト。
ヤマト「あー、辛気臭え！バカ女が！お前は俺の道具だろ！道具が一丁前に意思なんて持ってんじゃねえ！」
取り巻き女1「行こ！ヤマト♪」
ひとり取り残されるマヤ、ぼろぼろになりながら実家の母親に電話をかける。
マヤ「もしもしお父さん・・・ううん、元気だよ・・・うん・・・」

×××

工場。
出かける準備をしているサトシ。
リツコ「サトシ、どこ行くの・・・」
サトシ「しばらく閉めて留守にする。お前ももうここには来るな。シュウさん、行こう」
リツコ「ちょっと待ってよ・・・！」
立ち去る二人。

取り残されたリツコ。
暫くして、そこにやってくるマヤ。
リツコ「あなたは・・・」
マヤ「・・・」
リツコ「その節は・・・なんとお詫びしたら良いか・・・」
マヤ「・・・違うんです」
リツコ「え？」
マヤ「違うんです、私、実は・・・」

×××

ヤマト達のアジト。
ヤマト「成田はあれから連絡とれねーのか」
部下1「はい」
ヤマト「飛んだか？」
部下2「案外デブの弟と同じ飛び方してたりしてな」
取り巻き女「死んだってことー？」
部下3「どうします？」
ヤマト「あんなオンボロ工場に実際価値ねーからなあ。婚約者がいたろ？風俗かなんかに沈めて支払ってもらうか」
と、そこにやって来るリツコ登場。
ヤマト「マジかよ。飛んで火に入る夏の虫だぜ」
リツコの後ろにはマヤ。
ヤマト「あ？」
リツコ「彼女から全部聞きました」
ヤマト「マヤ、てめー裏切ったな？」
リツコ「なんで奪うんですか。人のかけがえのないものを奪って楽しいんですか・・・」
ヤマト「楽しいね」
リツコ「それでも人間ですか！もう帰ってこないんですよ？私達の日常も・・・ルイくんも・・・もう二度と・・・あなた達のせいで・・・！！」
泣きながら訴えるリツコ。
ヤマト「おいおい、たまんねえ顔で見るんじゃねえよ。昂っちまうじゃねえか。俺らさ、AV事業もやってんだよね。ただのAVじゃないぜ？違法の会員サイトに出回る裏モノだ。
最近マニアックな客が居てさ、丁度殺していたぶるスナッフ系が欲しいって言われてたとこなんだよ」
リツコ「・・・そんなことしてバレないとでも？」
ヤマト「それがバレないんだよ！！俺らのグループのバックには中国マフィアの始末屋がいてな。グループ内の不都合は全て奴らが闇に葬ってるのさ！・・・（部下のひとりに）おい、兄貴に言ってワンさんに始末の依頼だ」
リツコとマヤに迫るヤマト達。
ヤマト「さぁ、大人しくしてもらおうか」
リツコ、隠し持っていたナイフを取り出す。
リツコ「殺す・・・あなたを殺して・・・私も・・・」
が、ヤマトが突き飛ばす。
ヤマト「クソアマが！調子ぶっこいてんじゃねーぞ！」
倒れ、部下に捕まるリツコ。転がるナイフ。
と、部下に取り押さえられていたマヤ。相手の指を噛む。
部下「痛え！」
抜け出したマヤがリツコを取り押さえてる部下を落ちていたナイフで切る。
逃れるマヤとリツコ。ヤマトの部下達と繰り広げられる立ち回り。だが、攻防の末、遂に取り押さえられ注射で眠らせる二人。

×××

ビデオ★の撮影。
部下「今からこの二人を痛ぶって殺しちゃいまーす！まだ死んでないですよー！薬で寝てるだけでーす！」
ヤマト「やれ」
部下「今から気持ちよくして起こしてから、痛ぶって殺そうと思いまーす！」
二人の服を乱暴に脱がそうとする部下達。
部下「誰が先だ？」「じゃんけーん・・・」
と、そこにやって来るサトシとシュウ。

ヤマト「お前！！」
ぐったりしているリツコを見て、
サトシ「リツコ・・・」
ヤマト「なんだ？ヒーロー気取りか？だったら・・・」
笑い出すサトシ。
ヤマト「お？ショックで気でも触れたか？」
サトシ「クックックッ・・・ちょうどよかったよ。ままごとにも飽きてたとこだ」
ヤマト「あん？何の話だ？」
中国語っぽい言葉で会話し笑い合うサトシとシュウ。
ヤマト「何喋ってんだ？殺すぞ？」
サトシ「ままごとの演技に疲れたって言ったんだよ。成田サトシ役のな」
ヤマト「はぁ？」
サトシ「楽しかったけどな。なぁシュウさん」
シュウ「ああ」
サトシ「まさか同じグループ内で狙われるなんてな」
シュウ「それだけ自然に溶け込めてたってことよ。すごいよな俺たち」
ヤマト「あん？何言って・・・」
と、そこにやってくるコウ。
コウ「（サトシに）お疲れ様です・・・ワンさん」
ヤマト「ワン・・・！？」
サトシ「はじめましてだったな。私がワンだ。もう3年にもなるかな。成田サトシを殺したのは」
ヤマト「え？」
サトシ「私はなり済ますのが趣味でね。まぁ、成田の場合元々塞ぎ込んだやつでねー。他者との交流もほぼなく周りも障害者だけだったから楽だったよ。
弟も楽に懐いたしな・・・ああ。公的な書類は全て裏で手に入るから言ってしまえばもう本人なんだけどね」
シュウ「俺たちは人間を消すのが仕事だからよ。いいぜ？あの町外れの工場は。成田も成田の両親も他の依頼者も全部あの工場の土の下さ！誰の関心も無い寂れた工場だ！怪しむやつも誰もいやしねえ」
コウ「だから言ったろ？この世の全てを疑えって。お前は地雷を踏んだんだよ、ヤマト。ドボンだ」
ヤマト「兄貴・・・」
サトシ「それで？コウくん。依頼の方は？」
コウ「こいつら（ヤマトと部下達）です」
ヤマト「兄貴？嘘だろ？」
コウ「ああ嘘さ！最初っからな！どうだ？自然だっただろ？」
ヤマトの目から涙が溢れる。
ヤマト「だ、騙したのか？」
コウ「よくグループをデカくしてくれた。おかげで更にたんまり稼げるよ。ありがとな。お前はもうお役御免だよ。終幕だ」
シュウに銃口を向けられるヤマト。
ヤマト「兄貴・・・信じてたのに・・・うぅ」
コウ「この稼業で最も大事なことさ・・・自分以外信じるな」
ヤマト「ちくしょーーー！！」
銃声と共に倒れるヤマト。
サトシが笛を吹くと入ってくる工場の障害者の従業員達。残るヤマトの部下を取り囲む。
サトシ「殺してミンチだ」

従業員達「ミンチ！ミンチ！」「殺そー♪殺そー♪」
逃げるヤマトの部下達。
それを追いかける従業員達。それに次ぐサトシ、シュウ、コウ。
一行が出て行くのを見計らい起き上がるマヤ。
マヤ「（リツコ）早く！今のうち！」
リツコ「（泣きながら）うっ・・・うっ・・・」
逃げる二人。

障害者従業員達に追われ戻ってくる部下のひとり。
部下「やめて、お願い、助けて・・・」
従業員「ダーメ♪」
繰り広げられる殺戮。
部下「ぎゃあああああ・・・！！」
悲鳴と共に響き渡る従業員達の無邪気な笑い声。

×××

数日後。雑踏の中。
荷物を抱えたリツコとマヤ。
リツコ「それじゃあ・・・行くね」
マヤ「元気で・・・」
リツコ「マヤさんは・・・行くとこあるの？」
マヤ「地元に帰る。父親がいるんだけどさ。喧嘩して何も言わずに出てきたきりだったから」
リツコ「気をつけてね」
マヤ「大丈夫。奴らに地元知られてないし。マヤってのも偽名なの。あ、あたしの本名は・・・」
リツコ「ううん！やめとこ？・・・元気でね」
頷くマヤ。
歩いてゆくリツコ。その背中を見送るマヤ。
（END）